高知県立
文学館
高知県立文学館ニュース
藤並の森
Vol.73

▲「春印象」© KIRINO TOMOAKI

リレー随筆

〈生きる力〉

桐野 伴秋

自然の営みの中で放たれる〝なにか〟を、探し求め私は風景の中を歩く。その先にある〝なにか〟は時に「生きる力」としてメッセージをくれる。

音を奏でるように色彩を感じ、風を纏(まと)う。五感が響き合いながら、ひとつの物語を生んでいく。特に「色」には秘められた力が宿ると感じている。

何故に私は、こんなに「色」にこだわって写真を撮るのだろう。

幼い頃、洋品店を営んでいた母の横で、色とりどりの、ボタンや糸に囲まれて過ごしていた。余り外で人と遊ぶのが苦手だった幼少期。私の遊び道具は、綺麗なボタンや、生地にあわせて用意されていた幾種類もの糸だったような記憶がある。

その頃手に取った鮮やかな色が、今の私の「生きる力」の源となっているのかもしれない。

私たちが住んでいる日本には、美しい四季の彩りがある。季節の移ろいは流れるように滑るようにいつの間にか、深く人々の心に根をおろす。驕ることなく巡りくる季節。

そんな、生き生きとした豊かな自然の中にいる事が嬉しくてたまらない時が有る。「ああ、これが生きていると言う事なのだ」一期一会の被写体を前に実感する。

この何とも言い知れぬ感情を、自分自身の世界感で表現したいと夢中でレンズの向こうの風景に向かう。

繊細で深い和の色彩は、見えない物の存在をより明確に醸し出してくれる。

すべての物に「美」を見いだそうと思う心こそが、本当は見えない大切な物までも見せてくれるのではないだろうか。

そして今回、私はもう一つの表現を改めて知る。それは「言葉」だ。

限られた文字数を無限大に組み合わせ、綴る文学者たちの言葉は一瞬にして、力となる。

ある時は温かなメロディに包まれたかのように、ある時は心臓を突き刺されたかのように…。

この度あまり縁のなかった文学の世界の扉を開くこととなった。私の作品がこの素晴らしい言葉の中で、どう生かされていくか不安でもあり、楽しみでもある。その先に用意されているメッセージは未知数だ。

写真と文学の旅…。

瞬間と永劫、交差する時間の中で描き撮られた心象風景と、言葉群。心に留まる言葉と風景を見出して頂ければ幸いである。

（写真作家）

展覧会紹介 Exhibition

桐野伴秋の世界と文学の旅
～土佐・日本そして世界へ～

平成28年
4月29日(金・祝)
▼
6月19日(日)
観覧料500円

昔、「角瓶と文庫本を持って旅に出よう」というテレビCMがありました。「電車の中で文豪たちとまず一杯」といったナレーションが入っていたように思います。

今回の展覧会は、物語性を感じさせる写真作家・桐野伴秋氏が醸し出す独特の美の幻風景と文豪たちの名作の世界を融合させることにより、それぞれの作品の世界をより深い味わいを持って鑑賞していただければとの意図で企画しました。

高知に在住し、高知県内の四季折々の様々な魅力を表現することはもとより、高知県を飛び出し日本全国、さらには広く地球規模で美しい風景を撮り続けている桐野伴秋氏。

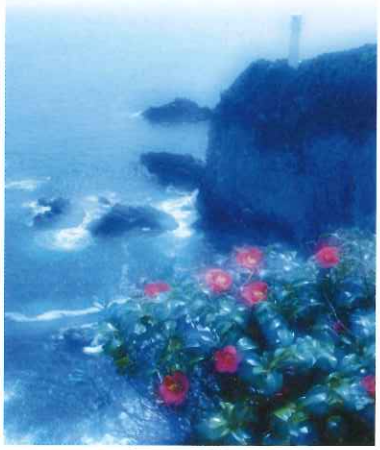
この展覧会では、そんな桐野氏の素晴らしい作品群の中から厳選したものを古今東西の文学の世界と重ねて紹介します。

1 桐野伴秋の世界と文学の旅

①土佐路の文学の旅

土佐路のコーナーでは、椿咲く足摺岬、月の桂浜、夕景の四万十川などの桐野作品を、田宮虎彦、大町桂月、上林暁などの文学作品の一節と重ねながら旅情に浸っていただきます。

ここでは、足摺岬の旅に触れてみたいと思います。明るい陽ざしに包まれた春の日、手前に椿の花、岬の先端に立つ白亜の灯台、眼下には岩に砕け散る波が…。


▲「地球望」©KIRINO TOMOAKI

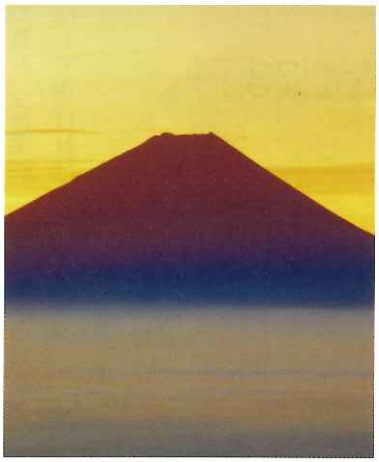
この岬を一躍有名にした田宮虎彦の名作『足摺岬』。灯台下の公園の文学碑には、「砕け散る荒波の飛沫が崖肌の巨巌(きょがん)いちめんに雨のように降りそそいでいた。」の一節が刻まれています。また、この物語の中に出てくるへんろ宿のモデルとなった「武政旅館」(現・足摺園)には「遠い岬の町に来て 人のこころの美しさを知る」と書かれた田宮直筆の色紙があります。この作品で作者が言いたかったことは、この岬の町の人の温かさではなかったかとも思われます。

②日本列島文学の旅

日本列島の旅のコーナーでは、富士山、雪の白川郷、岩手山などの写真を、太宰治、吉野弘、石川啄木の散文や詩などとともに紹介します。

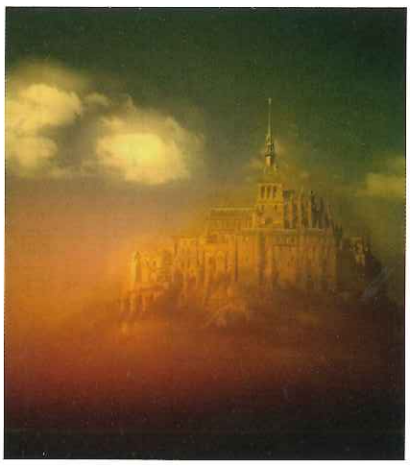
この紙面では、2013年世界文化遺産に登録された富士山にスポットを当ててみます。この山は、山部赤人など万葉集の歌や、古今集、新古今集、江戸時代には松尾芭蕉の俳諧など古くから文学の世界にも登場しています。

そして、昭和に入って多くの人が思い浮かべるのではないかと思われるのが「富士には、月見草がよく似合う。」の一節で有名な太宰治の『富嶽百景』です。この作品の中で太宰は富士に対して「私は、部屋のガラス戸越しに、富士を見てゐた。富士は、のつそり黙つて立つてゐた。偉いなあ、と思つた。「いいねえ。富士は、やつぱり、いいとこあるねえ。よくやつてるなあ。」富士には、かなはないと思つた。」といった思いを記述しています。


▲「赤富士」©KIRINO TOMOAKI

③海外の文学の旅

桐野氏の作品は日本を飛び出し世界へと広がります。海外の文学の旅では、フランスのモン・サン・ミシェル、イタリアのフィレンツェ、ギリシアのミコノス島などを、L・リッチ著の『ノルマンディ歴史紀行』の一節や、アンドレ・ジッドの日記、バイロンの詩などと融合させて紹介します。


▲「時空の彼方へ」©KIRINO TOMOAKI

2 「月」と「桜」と文学と

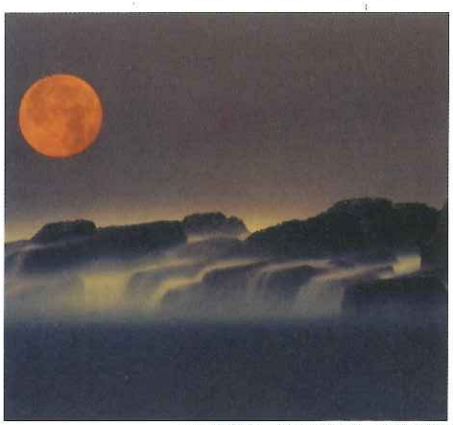
桐野氏の作品には、「月」や「桜」を題材にしたものが多くあります。

このコーナーでは、月や桜にまつわる桐野氏の写真と、古今の和歌や俳句などの世界を通じて、お互いの持つ美しさをより深く引き出して紹介します。

天の原　ふりさけ見れば　春日なる
三笠の山に　出でし月かも
（安倍仲麿／『古今集』）

ねがはくは　花の下にて　春死なん
そのきさらぎの　もち月の頃
（西行法師／『山家集』）

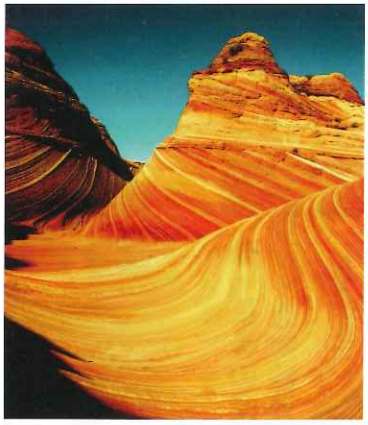
なお、「月」と文学のコーナーでは、かげろうの羽に喩えられる土佐典具帖紙と桐野作品とのコラボレーションも楽しんでいただきます。



▲「月の庭」©KIRINO TOMOAKI

3 映像で観るセドナ：奇跡の大地

桐野氏の名前を一躍有名にした写真集に『セドナ：奇跡の大地』があります。「アリゾナの宝石」ともいわれ、レッドロックと言われる赤い岩山に囲まれた街セドナ。古来よりネイティブ・アメリカンの聖地であり、近年はスピリチュアルなパワー・スポットとしても注目を集めている大地の神秘を映像で楽しんで頂きます。



▲「呼吸する大地」©KIRINO TOMOAKI

4 全国文学館めぐりの旅

ロビーでは、日本各地で撮した桐野氏の作品とともに、日本列島を実際に旅する場合にご参考にして頂ければと、全国都道府県別の主要な文学館の紹介と各地区ブロックごとに文豪の写真とともに作品の一節や箴言なども紹介します。

ひと昔前、―日本人は、景色には感嘆するが、風景を嘆賞することはない―と言った英国人がいました。桐野氏の写真から、その背景にある一地方全体の景観に思いを馳せて、桐野作品や旅の楽しみを何倍にも増幅させていただければと思います。

（館長／元吉喜志男）

桐野伴秋の世界と文学の旅
～土佐・日本 そして世界へ～

平成28年
4月29日（金・祝）
▼
6月19日（日）
観覧料500円

◆関連企画のご案内◆

■桐野伴秋アーティストトーク「美・生命（いのち）の煌き」を題して

・日　時：5月1日（日）午後2時～3時30分
・場　所：高知県立文学館1Fホール　※開場は午後1時～
・講　師：桐野伴秋氏（写真作家）　・参加費：参加には当日観覧券が必要です。
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）

■スペシャル記念コンサート　一流演奏者たちが演奏で展覧会を祝います。

・日　時：5月8日（日）午後2時～3時30分
・場　所：高知県立文学館1Fホール　※開場は午後1時～
・演　奏：Piano＋α（ピアノ：小林真人、打楽器：山本晶子、ウクレレ：KYAS）
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：参加には当日観覧券が必要です。

■能管演奏＆朗読＆トーク　ミラノ万博出演者の能管演奏とトーク、「地球・美の幻風景」の映像を背景に朗読も行います。

・日　時：6月5日（日）午後2時～3時30分
・場　所：高知県立文学館1Fホール　※開場は午後1時～
・出　演：野中久美子（能管演奏）、斎藤明子（朗読）、桐野伴秋氏（トーク）
・定　員：100名（電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。）
・参加費：参加には参加費1,000円（観覧料含む）が必要です。

野中久美子
©KIRINO TOMOAKI

■企画展関連トーク

①ふらり日本列島　文学の旅 ～東日本編～
・日　時：5月15日（日）
午後2時～3時30分

②ふらり日本列島　文学の旅 ～西日本編～
・日　時：6月12日（日）
午後2時～3時30分

※①②とも…場所：高知県立文学館1Fホール、定員：100名（要事前申し込み）
参加費：参加には当日観覧券が必要です。　※開場は午後1時～

他にも朗読の会など、多彩な関連企画を用意してお待ちしています。

■展示解説

桐野伴秋氏または当館館長による展示解説です。

会期中
毎週土曜日
午後1時半～
（約20分程度）

参加費：要当日観覧券
申　込：不要。
直接会場にお越しください。

文学館の常設展が変わりました！

来館のたびに新しい発見があると好評の〈変わる常設展示〉。今年度は3人の作家の入れ替えを予定しています。

▲坂崎紫瀾コーナー

NEW 展示公開中！

●「自由民権運動と文学」コーナー 幸徳秋水を坂崎紫瀾へ入れ替え

裁判所判事、新聞記者、民権講釈師など多彩な経歴を持ち、歴史家・伝記作家として才能を発揮。維新の英雄坂本龍馬を描いた初の小説「汗血千里の駒（かんけつせんりのこま）」の作者・坂崎紫瀾を紹介しています。

見どころ…多数の版が出た『汗血千里之駒』伝記『鯨海酔侯』関連資料・山内容堂書軸

NEW 展示公開中！

●「現代の文学」コーナー 上林 暁を小山いと子へ入れ替え

難事業に取り組む人間の苦闘を綿密な調査に基づいて描いた「海門橋」で注目を浴び、戦後「執行猶予」で直木賞を受賞。女性の生き方を正面からヒューマニズム豊かに描いた作家・小山いと子を紹介しています。

見どころ…文鎮、書類箱などの愛用の品、「虹炎ゆ」直筆原稿、日記

▲小山いと子愛用の品々や原稿など

展示は5月下旬を予定！

●「反骨の大衆文学」コーナー 大町桂月を黒岩涙香へ入れ替え

新聞記者のあと独立し、「万朝報（よろずちょうほう）」を発刊。明治の新聞界に大きな業績を残し、「新聞王」と呼ばれた黒岩涙香。「万朝報」紙上に「白髪鬼」「巌窟王（がんくつおう）」「噫無情（ああ）」など次々と翻訳小説を掲載し、圧倒的人気を得ました。

日本の探偵小説の元祖であり、大衆文学のパイオニアである黒岩涙香をご紹介します。

（学芸課／岡本美和）

見どころ…明治時代の新聞「万朝報」の原本、スイス製時計など涙香講和使節同行の折の土産

館長室から

「旅」と「文学」と

元吉 喜志男

この度の展覧会では、「文学と旅」をテーマとしてみました。わが国での古典的紀行文としては、平安時代の『土佐日記』や『伊勢物語』、鎌倉時代の『東関紀行』や『十六夜日記』などが浮かびます。この頃は、地理的な説明は文字による描写に頼らざるを得ず、自分の気持ちや旅情については和歌を挿入するという手法がとられています。江戸時代の『東海道中膝栗毛』になると、風景の説明より道中でのエピソードに力点が置かれ夜の宿場や旅籠の様子なども描かれるようになります。

旅の効用は、人との出会い、自然・文化・歴史とのふれあいなど様々です。旅先での一人の踊り子との偶然の出会が川端康成に『伊豆の踊子』を書かせました。雄大な富士山の景観は、山部赤人など万葉集の時代から太宰治の『富嶽百景』などにも見られるように、時代を超えて多くの文学者たちの心を捉えました。志賀直哉の『暗夜行路』における山陰・大山の自然は、主人公を大きく包み心境の変化や精神的脱皮を促進させます。異なった時代の人々との会話を通じて文化や歴史を感じるのも旅の醍醐味のひとつです。ルネサンス期の文化・歴史を背景にした古都・フィレンツェの街は、リルケやジッドなどのその後の人生に大きな影響を与え、目的は違え結果としてロシアへの旅へと誘いました。

旅に人生を重ねる文学と言えば、「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」の有名な冒頭の一文が思い出されます。芭蕉は俳句という形式で旅の中での心情を表現しています。その芭蕉が尊敬していた西行は短歌で、宗祇は連歌で旅の中に人生を捉えています。その西行の死生観にも通じる歌に「ねがはくは花の下にて春死なん　そのきさらぎのもち月の頃」があります。

この度の展覧会では、「桜」と「月」についても注目しています。

◆平成28年度の常設展示室 企画コーナーでは「近代高知詩人たちの系譜～情熱と魂の叫び～」をご紹介します。

■期　間　平成28年４月１日(金)～平成29年３月20日(月・祝)
■休館日　年末年始他
■場　所　高知県立文学館２階　常設展企画コーナー

西洋の影響を受けた日本近代詩は、1882(明治15)年、東京の丸善出版『新體詩抄』(外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎共著)から始まったというのが通説になっていますが、その前年には、文部省の『小学唱歌集』がでるなど、和歌、漢詩にかわる新しい詩の言葉が動き始めていました。

高知近代詩の源流は、時代の国家権力に対する、自由への闘いと挫折にあり、中央に先駆けて、1879(明治12)年植木枝盛によって詠まれた民権田舎歌に端を発しているといえます。

高知近代詩の特色としては、自由民権運動系統の詩やプロレタリア詩が主流だったとも言えますが、その他に、高知の風土や時代の変化と相まって、個性的な詩人たちによる作品が次々と登場し、その足跡を残しました。

明治時代には、自由民権運動の中で詩を書いた安岡道太郎や坂崎紫瀾、自由民権運動の影響と挫折の上にたつロマン主義の馬場孤蝶、美文韻文詩の大町桂月、1911(明治44)年に大逆罪で処刑されましたが、漢文学の素養をもちロマン的香気に溢れた幸徳秋水。

大正時代以降、南海の宮沢賢治と呼ばれ高知の近代詩を確立した岡本弥太、人生派詩人として戦後の高知詩壇の発展に力を尽くした島崎曙海、民衆の視点にたち時代の現実をヒューマニズム豊かに詠んだ大江満雄、調和と秩序を求め独自の魂の世界を形成した片山敏彦、ロマン・ロランとの交流のなか精神の高みをもとめて清雅に生きた上田秋夫、日本プロレタリア詩の歴史に凛然と輝く槇村浩。

そして、繊細な日常の断片をモチーフとしながらも、生の存在そのものの深部をかいまみせる作品を残した清岡卓行や現在も飽くなき生への追求をし続ける嶋岡晨といった高知ゆかりの人々が、作家として、詩人として活躍してきました。その個性は平成に至るまで次々と輩出されています。

今回は、明治、大正、昭和、平成と活躍した近代高知の詩人たちの魅力を詩・初版本・絵画・書簡などを通してご紹介いたします。

(学芸課長／津田加須子)

▲岡本弥太資料の数々

トピックス

畠中恵さんの「しゃばけ」シリーズ、第一回吉川英治文庫賞受賞！

高知県生まれの時代小説家、畠中恵さんの大人気シリーズ「しゃばけ」(新潮社)が、今年、第一回吉川英治文庫賞を受賞しました！

この賞は、シリーズ大衆文学作品とその著者を顕彰するもので、吉川英治文学賞・吉川英治文化賞が第50回の節目を迎えるのを記念し、2016年に創設されました。

「しゃばけ」シリーズは、病弱だけどやさしくて頭のいい若だんなこと一太郎と、彼を見守るふしぎな妖(あやかし)たちが、次々と起こる難事件を解決するお話が書かれています。

畠中さんは、受賞記者会見で、「読者の皆さんの時間とともに歩んできたシリーズ」と述べ、今後については、江戸だけでなく各地に残る民間伝承なども参考にしてお話を考えているとのこと。ファンなら誰でも気になる若だんなの結婚についても、いろいろと考えているそうです。

2001年の『しゃばけ』刊行以来、今年で15周年、シリーズ累計販売数は昨年でなんと700万部を突破！今年は「しゃばけ15周年祭」も企画されているそうです。

「しゃばけ」シリーズは、当館ミュージアムショップでも販売中です。長い間愛されてきた畠中作品を、この機会にぜひ読んでみてください！

(学芸課／永橋禎子)

土佐文学さんぽ 72

田岡典夫の「土佐日記」小説 ―「姫」の周辺―

猪野 睦

▲現在の国分（紀貫之邸跡）

稿料などどうでもいい。土佐日記を土台に何かかいておきたい。そう思いながら仕上げたという田岡典夫の小説に「姫」があった。8年目に好き勝手に仕上げたという紀貫之の「土佐日記」をなぞった異色作だった。土佐で亡くした幼女を17歳に成長させ、年の暮に大津を漕ぎだし、50日かけて一行とともに京の都へ帰りつくという小説だった。

紀貫之が国司として土佐へきたのは、千年近い昔の930年だった。紀貫之は国分での4年の間に幼ない娘を亡くした。その娘が17になって、ともに京へ帰るという着想の土佐ものだった。いわば田岡典夫なりの紀貫之への架空の鎮魂ともいうべき小説であった。

いまの南国市国分は小低い横長の山麓から南を流れる国分川にかけて広い農地が拡がっている。この音のしない建物のない今ではビニールハウスも混る一帯が、紀貫之が国司として住んだ都跡だった。この一帯の小字を地図で見ていくと国庁前、日吉、神ノ木、内裏、本屋敷、南屋敷、府中などの地名がぎっしり並び、なるほどここが都跡、邸跡だったのかと、地名から当時のにぎわいの都像がうかんでくる。

いまも国分では往時を偲ぶ「土佐日記つらゆき時代祭」がおこなわれ、平安装束の官人官女のあでやかな行列がにぎわう。甍の続く官人の都時代の再現である。

先日あらためて、この国分をたずねた。旧県道からそれて入った国分は、いかにも国衙といった感じで、地名の内裏（だいり）は土佐国衙跡として保存され、国府の碑があり、古今集の建碑があり、現代離れの時空があった。

内裏を囲みめぐっている小さな水路は、清流が音をたてて流れ、庭園の繁みには、木から木へ飛び移る小鳥の羽音がきこえた。この静かさのなかにたたずんでいると、古代にひきこまれる錯覚にとらわれた。

この地で京からつれてきた幼ない娘を亡くし、その亡児追憶を骨格とした「土佐日記」を、田岡典夫は読みとりながら、その悲嘆を和らげる土佐ものとして「姫」を構想しながらかきあげたのだったか。

戦前、戦中、戦後、田岡典夫は土佐往来をした。室戸まわりの関西からだった。貫之の手漕ぎ船の時代、汽船の時代とはむろん違うが、「姫」の沿岸光景、海面描出などには、その往来時の光景の記憶も生かされたろう。―逸文土佐日記―とも題している。（詩人）

資料受贈報告

―寄贈資料から―

『木積（こつみ）　森美沢歌集』

森美沢著
2015（平成27）年11月発行
265頁A5判
カバー　刈安と蓬草染　手織紬
森美沢製作

著者の森美沢さんは昭和8年安芸市生まれ。日々の哀歓を詠んだ歌を新聞・雑誌に投稿してこられました。今回の歌集はこれまでに新聞、雑誌の紙面を飾った作品を集めたものです。

明けちかき苺ハウスはぼんぼりのトンネルのごとし灯点（あかり）して
けんけんぱー開脚ぱっと此方むく昔少女のこゑごゑおぼろ

など女性ならではのやわらかな視線で日常を詠んだ歌624首が収められています。

あとがきによると「木積」とは、渚に大波が打ち寄せた形に打上げられた流木や、葦、塵芥などのこと。それを教わったのは、詩人の横山青娥（せいが）からだったといいます。

横山青娥は明治34年安芸郡安芸町（現・安芸市）生まれの詩人で国文学者。早稲田大学在学中に第一詩集『砂金』を出版、英文科講師であった西条八十に入門します。その後、『黄金の灯台』『蒼空に泳ぐ』『海南風』等の詩集を出版し、雄大なロマンをうたって海洋詩人と称されました。戦後は本郷学園、昭和女子短大で教鞭をとりつつ、国文学研究に重点を置き、『日本名詩選釈』『芭蕉の芸術観』など評伝や研究書を多く残しています。

『木積』に収められた

杉並（すぎなみ）区の日照奪はれたる家に忿（いか）りやすき師はひとり逝きけり

は昭和56年に亡くなった恩師・横山青娥を悼んだ歌です。

森美沢さんは青娥の安芸高校時代の教え子で、青娥晩年まで親交を深められました。当館には森美沢さんから青娥直筆書簡や青娥の直筆サインの入った貴重書を数多くご寄贈いただいています。（学芸課／岡本美和）

受贈報告（平成28年2月～平成28年3月）敬称略

▼**覇王樹社**・「CD「覇王樹」95周年記念　夕かげに　橋田東聲の歌　橋田東聲作詞　渡邊啓吾作曲　覇王樹社制作」▼**中脇初枝**・「ちゃあちゃんのむかしばなし　中脇初枝著　奈路道程画　福音館書店刊」▼**嶋岡晨**・「洪水 第17号　池田 康編　洪水企画刊」▼**食野雅子**・「マジック・ツリーハウス39 第二次世界大戦の夜　食野雅子訳　メアリー・ポープ・オズボーン著　KADOKAWA刊」▼**今淑子**・「大人のための残酷童話（台湾版）倉橋由美子著　鄭清清訳　新雨出版社刊」他▼**西一知記念資料館**・「西一知詩論集（韓国版）　西一知著　ハン・ソンレ訳　ゴールドエッグ刊」他▼**三人社**・「山河　復刻版　第3巻　三人社刊」他▼**永野美智子**・「句集　零余子　第1集　永野美智子編　零余子の会刊」他▼**西村光一郎**・「詩集 修羅の恋歌　西村和三郎著刊」▼**島村三津夫**・「花衣　山中良子文芸作品集　山中良子著刊　島村三津夫編」▼**伊東喜代子**・「寺田寅彦先生と私―二十数年 寺田寅彦記念館に勤務して―　伊東喜代子著　寺田寅彦記念館友の会刊」▼**藤原義一**・「槇村浩が歌っている　藤原義一著刊」▼**日本現代詩歌文学館振興会・一ツ橋綜合財団**・「詩歌文学館賞三〇年［詩・短歌・俳句］　日本現代詩歌文学館振興会編刊」

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

4月17日まで好評開催中！

宮沢賢治 ことばの宇宙展

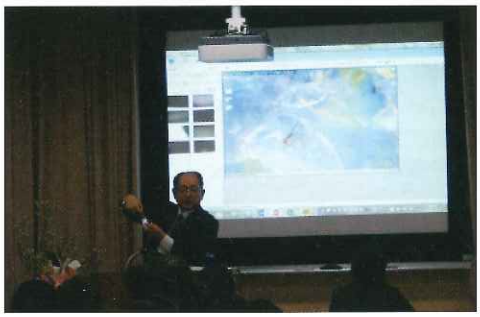
多彩な関連イベントを開催しました！

「宮沢賢治 ことばの宇宙展」では、賢治さんの世界観を体験する様々なイベントを開催し、多くのお客様にご参加いただきました。

展覧会初日の2月11日(木・祝)に開催された記念講演会「祖父から聞いた兄・宮沢賢治」は、賢治さんの実弟・宮澤清六氏のお孫さんで、林風舎代表の宮澤和樹さんにお話をいただきました。私たち読者は作品や伝記で宮沢賢治さんの生涯について知るのですが、ご親族ならではの親しい目線で賢治さんを紹介していただいたことで、より身近に生き生きとした賢治さんに思いを馳せることができました。宮澤様の穏やかな語り口に、ついつい楽しく優しい賢治さんの面影を探してしまいました。

▲宮澤和樹さんによる講演会の様子

▲石ッコ体験の様子



▲鈴木健司先生による講演会の様子

3月12日(土)には、「石ッコ賢さん」とあだ名された賢治さんのように、高知で発掘体験をする「高知で石ッコ体験！」を開催し、佐川地質館様のご協力の下、化石採掘に出かけました。地質館を見学し、高知が地質学的に大変恵まれた場所であることを学んだ後、午後から採掘に出かけました。大人も子どもも夢中になって2億年前の貝の化石「モノチス」を探しました。地質館の方の「時々、アンモナイトが出ることがあるよ」の言葉を聞いて、気持ちが盛り上がり、一生懸命探しました。採掘の後は、地質館の方々がお楽しみじゃんけん大会を企画してくれて、アンモナイトの化石が当たった強運の方もおりました。

3月13日(日)は文教大学教授・鈴木健司先生をお招きして講演会「オパールから見える宮沢賢治」を開催しました。鈴木先生は以前、高知大学で教鞭を執っておられ、約10年ぶりの高知とのことでした。

鈴木先生は現在、地質学者・宮沢賢治に焦点をあて、研究をされておられます。賢治さんの作品には、地質学者らしく鉱物が多く登場しますが、その中でもオパールは「貝の火」「楢ノ木大学士の野宿」で貴重な宝石として描かれています。講義ではオパールという石の特性を交え、作中でのイメージと合わせながらお話しいただきました。先生は実際に賢治さんが調査をした山に入り、当日は沢山の種類のオパールをお持ち頂き、みなさん原石を手にとってお話しを聞くことで、理解が深まった様子でした。

その他、工作イベントや、プラネタリウム上映会など、賢治さんの作品をイメージしたイベントの他、ティーチャーズデーを開催しました。賢治さんの作品は校種を問わず教材として掲載されていますので、学校の先生方に向けた、教材研究として活用頂ける解説を行いました。社会教育施設として、学校教育現場への還元ができるように、今後も取り組んで行きたい活動です。

（学芸課／谷岡真衣）

人事異動

【転入】

新所属　文学館事業課　旧所属　美術館　松本　友

【転出】

新所属　美術館　旧所属　文学館学芸課　門田　貴美子

●平成28年度(上半期)文学カレッジ　受講生募集！●

高知県立文学館では、高知ゆかりの作家や作品について、じっくり学べる文学カレッジを開催しています。

常設展示とリンクする文学カレッジによって、さまざまな角度で高知の文学をお楽しみいただければと思います。

日程：第1回 4／23(土)「近代高知 詩人たちの系譜」講師：津田加須子
第2回 5／28(土)「詩を生きる、ということ」講師：林 嗣夫
第3回 7／23(土)「坂崎紫瀾の詩を中心に」講師：猪野 睦
第4回 8／27(土)「昭和初期の詩を読む」講師：佐藤元紀
第5回 9／24(土)「片岡文雄ー「山鬼」論」講師：永橋禎子
（敬称略）

時間：各回とも午後2時～3時半まで

場所：高知県立文学館1階ホール　定員：100名

※事前に専用の申込用紙か電話または文学館受付でお申込みください。
また、内容など詳細はお気軽にお問い合わせください。

高知県立文学館ニュース 第73号 平成28年4月15日発行 〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目1番20号 電話088-822-0231 FAX088-871-7857

企画展年間案内

※企画展の観覧料には常設展の観覧料も含まれています。

4月～6月

桐野伴秋の世界と文学の旅
～土佐・日本そして世界へ～

4月29日(金・祝)～6月19日(日)　場所：企画展示室　観覧料：500円

展覧会の紹介をしています！　詳細はこの館報の表紙・2ページ・3ページをご覧ください。

桂浜心象／©KIRINO TOMOAKI

■ メンテナンスのため 6/20(月)～7/5(火) まで 臨時休館 いたします■

7月～9月

～デビュー20周年記念～ 島田ゆか絵本原画展

7月9日(土)～9月19日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円

カナダ在住の絵本作家・島田ゆかさんは、人気の「バムとケロ」シリーズをはじめ、魅力的な絵本を世に送り出しています。

島田さんの絵本は、画面の隅々まで驚くほどていねいに描き込まれ、何度読んでも新しい発見があり、子どもから大人まで大きな支持を得ています。島田さんの素敵な原画を通じて、絵本の世界をお楽しみください。

「あの日からずっといっしょ」
©Yuka Shimada／Ojigi Bunny Inc. 2014

10月～平成29年1月

源氏物語展 ～雅のDNA～

10月1日(土)～平成29年1月9日(月・祝)

場所：企画展示室　観覧料：500円　(※12／27～1／1は年末年始のため休館)

1000年以上も前に書かれた『源氏物語』には、恋に生きる男女の心や「あはれ」の情趣が、美しく豊かな筆致で描かれています。また、王朝びとを中心に口伝え・筆写され、様々な写本が伝えられたほか、文学作品や美術工芸のモチーフとしても好まれました。

源氏物語の世界を、各帖の魅力と和歌を中心にご紹介します。

壮大な平安文学の世界に浸っていただければと思います。

源氏物語画帖／早稲田大学図書館所蔵

平成29年1月～3月

犬、猫、作家。～作家とペットの素敵な関係～

1月21日(土)～3月20日(月・祝)　場所：企画展示室　観覧料：500円

私たちにとって身近な動物である「犬」と「猫」。本展では、「作家たちの飼い犬・飼い猫」に焦点をあて、ペットであり、家族であり、また時に頼もしい創作の支えとなっていた彼らの様々な姿をご紹介します。

ペットだけに見せる作家の意外な素顔や、作家ならではの鋭い目を通して表現された「犬」「猫」作品をお楽しみください。

大原富枝と愛犬・三郎／
本山町立大原富枝文学館所蔵

19th

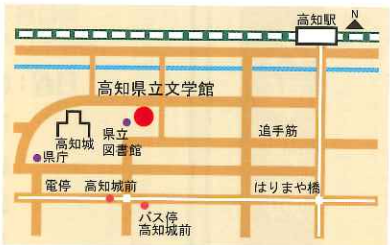
高知県立文学館は、今年で19歳。
平成29年11月に、開館20周年を迎えます。
これからも、ますます進化する高知県立文学館にご期待ください。

利用案内

開館時間	午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）
休館日	年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。 ※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
観覧料	一般360円　企画展はそれぞれ異なります。 20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、 高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
駐車場	なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
附帯設備	ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」
貸出施設	企画展示室、ホール、茶室

E-mail：bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



●高知龍馬空港より空港連絡バス〈県庁前行〉「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
●路面電車「高知城前」下車、北へ徒歩5分
●バス停「高知城前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館
〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話　088-822-0231
FAX　088-871-7857

フェイスブック好評配信中！
Facebook：https://www.facebook.com/kochi.literary.museum